



徳丸 宜穂氏

オープン カレッジ

筆者と同年代の方で、大学入試を経験した方はご記憶かも知れないが、20年以上前的小論文の定番の一つは「多文化共生」について論じさせる問題だった。「模範解答」は

とくまる のりお イノベ

たいてい、文化の多様性が大事だ、というものだった。最近では「ダイバーシティ」の語があちこちで使われるようになり、20年経って「多様性の時代」がいよいよやってきたかに見える。進化論が教えらるるように、多様性は社会や組織の適応にとって枢要だから、それが本当ならば好ましい。ある投資ファンドでは、トレーダーの机を定期的にシャッフルするそうだ。一定の場所に長く居ると、近くに座っている同僚の投資判断基準の

企業と地域産業の進化論

生物の仕組みに学びたい

アが異口同音に語っていたのは、「コスト指向が強すぎて、挑戦的な設計を盛り込めない」「スピード開発の要求が強いので、仕様や設計を十分に練る余裕がない」「企画部門の業績指標が△新規機能の搭載数▽だから、いたずらに新機能を搭載した製品を出す状況に陥っている」などである。

また、筆者たちが日本、中国、韓国それぞれ約200名ずつのエンジニアを対象に実施したアンケート調査によれば、担当開発プロジェクト以外の業務に従事する労働時間の比率は、韓国10・2%、中国11・4%に対して、日本は

18・1%にもなる。日本のエンジニアの「多忙さ」を浮き彫りにする数字である。探索と試行錯誤の工数をどれだけ取り込めるかによって、開発過程で生み出される多様性の質と量は決まる。その多様性が結局は革新の「元手」になる。だが以上のような、過度な収益圧力やスピード開発の要求、管理技法の機械的適用は、多様性の創出を阻害するように思える。企業内部のみならず経済全体でも、多様性をいかに創出するかが重要である。これには金融機関も重要な役割を果たしてきた。銀行の支店長である知人によれば、同じ財務